

# 病虫害発生予察注意報 第 1 号

## 病虫害名 モモせん孔細菌病

1 発生予想 モモせん孔細菌病が、今後多発する恐れがある。

2 対象地域 県下全域

### 3 根拠

- (1) 6 月上旬の巡回調査では、調査ほ場 9 地点のうち 5 地点で発病葉率が平年を上回った(表 1)。また、発生ほ場率も平年を大きく上回り、発生はやや多かった前年と比較しても高かった。  
発生ほ場率：66.7% (平年 36.7% 前年 33.3%)
- (2) 近年、県内では本病の発生が目立つ傾向にある。6 月上旬の巡回調査では、全般に春型枝病斑の発生も目立ち、越冬菌密度が高かったものと推測される。
- (3) 気象庁 6 月 10 日発表による向こう 1 か月の気象は、平均気温が平年並または高い確率がともに 40% (低い 20%)、降水量は平年並の確率が 40% (多い 30%、少ない 30%) と予想されており、平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みで、本病の発生に好適である。

表 1 モモせん孔細菌病の発生状況

調査園地	6 月上旬における発病葉率 (%)				
	平成 20 年	平成 21 年	平成 22 年	(平年)	本年
小諸市三岡	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0
佐久市平根	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0
豊丘村河野	0.0	0.0	6.9	1.7	3.5
松本市波田三溝	0.0	0.0	2.5	1.6	7.8
須坂市相之島	0.0	0.0	3.1	2.3	6.0
中野市新井	0.0	0.0	0.0	2.0	0.7
長野市川中島	0.0	0.0	0.0	0.0	1.8
長野市若穂川田	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
山ノ内町平穏	0.0	0.0	0.0	0.0	4.7

注) 平年は過去 10 年の平均値。但し、須坂市相之島は H18 ~ H22、長野市川中島及び山ノ内町平穏は H20 ~ H22 の平均値。



春型枝病斑の状況 (H23.6.6 撮影)



葉病斑の発生状況 (H23.6.9 撮影)

#### 4 防除対策と留意点

- (1) 風当たりの強い園では防風垣や防風ネット等を設置し、風雨による病原菌の拡散が起こらないような環境をつくる。
- (2) 葉病斑や春型枝病斑がみられている園では、果実への感染防止を図るため、早めに袋掛けを実施する。
- (3) 多発園では7月上旬までデランフロアブル 600 倍液、バリダシン液剤5の 500 倍液、チオノックフロアブル 500 倍液、トレノックスフロアブル 500 倍液、マイコシールド 1500 倍液のいずれかを散布する（参考：表 2）。薬剤を選択する際は、使用時期（収穫前日数）や使用回数等の登録内容を遵守する。
- (4) 天気予報等を活用し、散布予定日に降雨が続くと予想される場合は防除を前倒して行うか、天候の回復後、葉が完全に乾いてから速やかに行う。薬剤の散布間隔があきすぎないように注意する。
- (5) 越冬菌密度の低下を図るため、9月中旬から10月中旬にかけて4-12式ボルドー液又はICボルドー412の30倍液を散布する。

表 2 （参考）モモせん孔細菌病に対する主な防除薬剤と使用基準

薬剤名	成分名	希釈倍率	使用時期	使用回数
チオノックフロアブル トレノックスフロアブル	チウラム	500倍	収穫 7日前まで	5 回以内
デランフロアブル	ジチアノン	600～1000倍	収穫 7日前まで	4 回以内
ビスダイセン水和剤	ポリカーバメート	500倍 300倍	収穫45日前まで 休眠期	3 回以内
バリダシン液剤 5	バリダマイシン	500倍	収穫 7日前まで	4 回以内
マイコシールド	オキシテトラサイクリン	1500～3000倍	収穫21日前まで	5 回以内

チウラムを含む農薬（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）の総使用回数は5回以内。  
オキシテトラサイクリンを含む農薬（アグリマイシン-100、マイコシールド）の総使用回数は5回以内。  
デランフロアブルはアプローチB I、ニーズを加用すると薬害を生じるので加用しない。  
マイコシールドは薬剤耐性菌出現の恐れがあるので注意する。

長野県病害虫防除所  
担当：飯島 章彦（所長）  
木曾 秀紀（担当）  
TEL：026-248-6471（直通）  
FAX：026-248-6473  
E-mail：bojo@pref.nagano.lg.jp